一丈餅

今日のように化学肥料のなかった時代には、うまい米を作るためにも、たくさんの収量をあげるためにも必要なものは積み肥と下肥であった。特に積み肥の多寡は作柄に大きく影響した。そのころ農家ではこの積み肥（堆肥）をつくるため自家の経営面積に応じた規模の積み肥場を設け、だれが一番早く一丈（約三メートル）の高さにするかと、一丈の肥を積むことを目標にがんばり、村中で競い合った。

積み肥の主原料は藁と草だが、雄物川筋のケダニの生息地には草がよく繁茂した。このケダニにさされると命はないものとわかりながらも命がけで草刈りに精を出した、それほどまでに積み肥つくりには真剣であった。かくて一丈の高さに達すると一丈餅といってお祝いの餅をついて村中に配り手柄を誇った。一丈餅を搗いた農家は精農家として人々から尊敬されたものだったという。

（収集と文　後藤廉二）